

国

語

座席番号
番

受験番号
番
氏名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて十ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認して下さい。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を記入してください。座席番号と受験番号は算用数字で記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

【一】次の文章をよく読んで、あとの問い合わせに答えなさい。（字数は記号・句読点も一字と数えます。）

主食と副食

ヨーロッパの人びと、とくにイギリス人は、どんな食事をしているのでしょうか。たいていの人は、「ヨーロッパ人の主食はパンです」とか、「パンと牛肉が主食です」などと答えるようです。

しかし、このような答えは、まちがいというべきでしょう。そもそも、「主食」と「副食」というような考え方が、ヨーロッパにはないからです。だいたい英語にも、フランス語にも、「おかず」などという言葉はありません。「ご飯」が「主食」で、「ご飯を食べる」ことこそが、食事をすることだという日本人の感覚は、ヨーロッパでは通用しません。「ご飯」という言葉が、「食事」の意味にも、「煮込んだ米」の意味にもとれるということが、日本の食生活の特殊性を示しています。反対に、ヨーロッパ人なら、日本人が「おかず」と思うようなものばかりをいろいろ食べても、それで「食事」になつてているのです。

もちろん、パンも食べますが、それもいろいろな食べ物のなかのひとつというべきでしょう。アメリカから「コロンブスの交換」でヨーロッパにもたらされたジャガイモであっても、同じような道を通つてきたトウモロコシであってもかまわないし、場合によつては、それがバナナであっても、またはステーキのような畜産物であっても、①「食事」は成り立つたのです。「主食」と「おかず」の区別のある国は、世界中でもむしろ少ないので、かもしれません。反対にヨーロッパ人の場合は、ヨーロッパの農業が、多くの場合、穀物栽培と牧畜の混合になつていましたので、「雑食」性になつてしまつたのでしよう。

そのように考えると、砂糖も食品として、たいへん大きな意味をもつたことになります。紅茶や砂糖の話題は、イギリス人の生活ぶりからすると、穀物の話題と同じくらい重要なことなのです。じつさい、いまでもイギリス人は、平均してカロリーの一五ペーセントから二〇ペーセントを砂糖からとつていて、とさえいわれているのです。イギリス人は、食事の最後に砂糖をたっぷり使つた「スウェイート（甘いもの）」というお菓子類を食べるのがふつうですし、紅茶にも砂糖をたっぷり入れて飲む人が、多いからです。

砂糖は、どうでもよい嗜好品ではなく、有力なカロリー源となつてゐるうえ、紅茶と組み合わせられて、「イギリス風朝食」の基本となり、産業革命時代のイギリス人の生活の基盤になつたのです。

夏目漱石とジョンソン博士を閉口させたボリッジ

空欄X

しかし、それにしても、その後も朝食がどんなに変化しやすいものであったかについて、おもしろいエピソードが残っています。登場人物は、東京大学の英文学の教授であり、『我輩は猫である』などを書いた明治時代の文豪でもあつた夏目漱石と、すでに何度か登場した、イギリスの文学者ジョンソン博士です。

一九世紀も後半になつてロンドンに滞在した夏目漱石は、悪名高いイギリスの食事に音^{*}をあげ、ジョンソン博士を引き合いに出して、皮肉たっぷりの手紙を日本に送つてゐるのです。助手に雇つたスコットランド人をからかうことを、楽しみのひとつにしていたジョンソン博士は、彼の編集した有名な英語辞書のなかに、「オート麦」という項目を設けました。「オート麦」というのは、麦類のなかでも下級なものです。イギリス人の朝食によく出てくる「ポリッジ」とよばれる、一種のお粥^{かゆ}のような食べ物の材料です。「ポリッジ」は、当時のことはよくわかりませんが、いまでは砂糖を入れて、ミルクで溶きながら食べるのがふつうです。それでもお世辞にも、おいしいものではありません。

ところで、ジョンソン博士は、スコットランド人をからかつて、その辞書に「オート麦とは、イギリスでは馬に与えているが、スコットランドでは人が食べている穀物」と書きこんだのです。しかし、およそ一〇〇年後に、ロンドンに留学した夏目漱石が出くわしたのは、毎朝食卓に出てくる「ポリッジ」でした。つまり、この一〇〇年ほどのあいだに、スコットランドどころか、イギリス南部のロンドンでさえ、「ポリッジ」がふつうの朝食になつていたわけです。そこで漱石はすかさず、「さては、イギリス人がすべて A になつたらしい」と、日本の友人に書き送つて、うさばらしをしているのです。

ジョンソン博士が活躍した時代と、漱石がロンドンに留学した時代とのあいだには、一八世紀末から一九世紀はじめにかけて、「産業革命」といわれる大きな社会の変化が起きました。これまでの家のなかで行われていた手工業に代わって、工場がふえ、機械や蒸気機関のような動力が用いられるようになつて、工業や鉱山業が急速に発展したのです。蒸気機関は、交通機関にも応用され、鉄道が全国を走るようになりました。それについて、ロンドンはもとより、リヴァプール、マンチエスター、バーミンガムなどという都市が大発展をとげました。こうして、イギリスでは、都市に住み、工場で働く労働者のほうが、農民の数よりも断然多くなつていつたのです。

ほかでもないこの時期に、じつは「ポリッジ」のほか、「砂糖入り紅茶」を中心とする「イギリス風朝食」（イングリッシュ・ブレックファースト）が、生まれたのです。つまり、半世紀ほど前のジョンソン博士の時代には、ぜいたく品だとか、麻薬のような「毒」だとかいわれて、ウエスレイのようにその使用に反対する人が多く、大論争を巻きおこした「砂糖入り紅茶」が、この時代には、労働者のふつうの朝食となつてしまつたのです。

ところで、「イギリス風朝食」の特徴は、何よりもヨーロッパ大陸のもの、つまり、「コンティネンタル・ブレックファースト」にくらべて、「重い」ことです。現在の「イギリス風朝食」は、ベーコンや卵がつき、トーストもついていることが多いので、昼食より重い感じもします。このように「重い」朝食は昼間、からだを使って働く労働者には、適しているのだといわれています。

また、この時代には同時に、昼食と夕食のあいだが開き、それをうめるために、「アフタヌーン・ティー」や「ティー・ブレイク」の習慣も生ま

れました。午後四時ごろにひと休みして、ビスケットなどといつしょに紅茶を飲む習慣です。ですから、このころになるとイギリス人は、一日四食になつたというべきなのかもしません。

「聖月曜日」の撲滅と都市労働者の生活

それでは、このような変化は、どうして起つたのでしょうか。この理由を考えるには、都会の労働者たちの生活がどんなものであつたかを、いろいろな角度からみなければなりません。

「産業革命」が進むにつれて、イギリス人の多くが都市に住むようになりました。一九世紀の終わりごろまでには、おそらくイギリス人の四人のうち三人までが、都会の住民となつたでしょう。

農村では、共同の所有地であった山林などで、自由にたきぎをとり、家畜を飼うことができましたが、「廻い込み」（エンクロージャー）といわれる運動が起つて、こうした共同で使える土地がなくなつてしまつたために、人びとは農業を捨て、都会に出たのだという意見があります。この意見には反論もありますので、どれくらい正しいかはよくわからないのですが、理由はともかく、たしかに都会の人口が圧倒的に多くなつたことは事実です。しかも、そのために、イギリスの民衆の生活環境がすっかり変わつてしまつたことも、まちがいありません。

都会の労働者の住宅は、狭くて、汚く、トイレも水道もないのがふつうでした。しつかりした調理のできる台所もありませんでした。二軒が背中合わせになつていたために「バック・トゥ・バック・ハウス」とよばれた彼らの住宅の悲惨な状況については、マルクスの親友であったエンゲルスが『イギリスにおける労働者階級の状態』という書物に詳しい記録を残していく、よく知られています。

都会の労働者には無料で採取できる燃料もむろんありませんから、店で石炭を買ってこなければなりませんでした。ということは、お金がなれば、暖をとることもむずかしいということです。短い時間で、きちんとした朝食を準備するなどということは、まったく不可能でした。ふつうは、暖炉の上に鍋をかけて調理をするようななかたちだつたのでしよう。ですから、自宅でパンを焼くなどということは、なおさら考えられないことになりました。パンも店で買うほかなかつたのです。

人びとの生活の場が、農村から都市に変わつたことで、もうひとつ著しく変化したことがあります。それは、時間をどの程度正確に守らなければならぬかということです。農村の生活は、季節によつて農作業などの手順は決まつていましたが、細かい時間の使い方は、むろん個人の自由にまかされていました。農民は、天気のよいときにしつかり働き、雨が降れば休まざるをえないところもありました。日本でも「晴耕雨読」という言葉があるのは、そのことを指しています。

同じように、伝統的な職人の世界も、「職人気質」などと称して、個人の行動の自由がかなり認められていました。週末に飲んだくれ、二日酔いの月曜日はほとんど仕事をしないという、「聖月曜日」（セント・マundy）の慣習もひろく認められていました。はやり歌にも、こんな文句がありました。

月曜日は日曜の兄弟さ。

②火曜日も似たようなものさ。

水曜日には、教会でお祈りでもしなきや。

木曜は半休に決まっているし、

金曜日では、糸つむぎには遅すぎる。

土曜もむろん半休さ。

しかし、工場制度がひろがると、時間を厳格に守ることが要求されるようになりました。半分酔つ払つて、遅刻ばかりしていくような労働者がいるようでは、工場は経営できません。だから、「聖月曜日」に象徴されるような、時間にルースな生活は認められなくなりました。

そうなると、朝食は簡単に準備ができる、しかも、すぐに元気が出るようなものでなければならないことになりました。「晴耕雨読」や「腹時計」のような、自分の自然な都合によるのではなく、機械時計の刻む時刻を正確に守つて行動するということは、それに慣れていない人には、たいへんむずかしいことなのです。

私たち、いまの日本人にとつては、そんなことはたいしたことではないよう思えますが、③日本人でも、江戸時代はそうではありませんでした。明治以降、長い期間をかけて、日本人全体がそのようになつてきました。それに、個人的にいえば、保育園や幼稚園のときから、大学を卒業するまで、「遅刻は罪悪」だと教育されてきた結果、日本の大半の大人は、機械時計の時刻にそつて、正確に活動できるようになつてしているのです。

そのうえ、こんなこともありました。産業革命がすすんで、都市が人びとの生活の中心になると、労働者の家族はそのほとんどが、家庭の外に仕事をもつようになりました。母親も、子どもたちも、それぞれにどこかで雇われるようになつたのです。この点でも、長い時間をかけて朝食の準備をする余裕は、なくなつてしまつたのです。

「イギリス風朝食」の成立

産業革命後のイギリスで、都市労働者の生活条件に見事に合つたのが、④紅茶と砂糖と、店で買うパンやポリッジの朝食でした。ポリッジも、お湯さえ沸かせればかんたんにつくれます。産業革命の時代、B、一九世紀はじめごろの労働者の民衆の生活ぶりについて、詳しい聞き書きを遺したヘンリ・メイヒューによれば、ロンドンの街路には、ありとあらゆる種類の屋台の簡易飲食屋が、開業していくといいます。C、おおかたの労働者は、自宅で朝食をとつていたのですが、このような屋台がはやつたということは、自宅で朝食をつくれない人も多かつたことを示しているのでしょうか。それはともかく、「砂糖入り紅茶」をベースとする「イギリス風朝食」は、きちんとした台所がなくても、お湯さえ沸かせれば、なんとか用意す

ることができました。□D、とくに紅茶と砂糖は、カフェインを多く含む即効性のカロリー源として、決定的な意味をもっていました。「聖月曜日」の慣習がシンボルとなつて、産業革命前のいい加減な労働時間の管理が、ビールに近いエールや、ウイスキーがもとになつて、ジンなどの飲酒の習慣とつながつていたのと、好対照になつていて、といえましょう。

即効性という意味では、朝食のみならず、仕事の合間の「ティー・ブレイク」も、同様の意味をもつていました。⑤朝から十分なカロリーを補給し、ぱつちりと目の醒めた状態で働く労働者、それこそは、工場経営者が絶対に必要としていたタイプの労働者だつたのです。

こうしてカフェインを含む紅茶と高カロリーの砂糖、砂糖からつくられたジャムと糖蜜——伝統的に高級品のイメージのつよい蜂蜜のまねをした、もつとも初期の典型的な「代用食」です——などは、イギリス人の生活に欠くことのできない基礎食品となりました。イギリス人の労働者は、しばしば食事を「ホット・ディッシュ」、つまり「温かい食事」と「コールド・ディッシュ」に区分します。温かい食事は、温かいというだけでご馳走なわけです。冷たいパンを、一瞬にして「ホット・ディッシュ」に変えてしまう、一杯の「砂糖入り紅茶」がなければ、一九世紀イギリスの工業都市における労働者の生活は、成り立たなかつたはずなのです。

もつとも、紅茶そのものはカロリーがないうえ、価格も高いというので、はじめのうち、栄養学者などのあいだでは、きわめて評判が悪い食品でした。当時のデータでみると、一ペニーで買物をするとして、何カロリー一分の食品が買えるかをみると、ジャガイモなら一〇〇カロリーも買えるし、ポリッジでも八八〇カロリーは買えるが、砂糖は価格が高いので二一〇〇カロリー足らず、紅茶はむろんカロリーなしだというのです。もつと安上がりで、栄養価の高いジャガイモとポリッジを中心とした、イギリス北部に多くみられる食事に対して、こうした食事は、主としてロンドンなど、南部の都市からひろがりはじめたといわれています。

□E、このように高価なのにカロリー不足の食事には、ある種の身分の印、つまり「ステイタス・シンボル」的な意味がふくまれていましたから、批判はあつても、人びとはそれをあきらめたりはしませんでした。結局は、北部からひろがりはじめた「貧民の食品」（オート麦やジャガイモ）と、「高価な食品」（茶や砂糖）とがかさなりあって、近代イギリス庶民の「朝食」が成立することになるのは、ロンドンにおける夏目漱石の経験がよく示しています。

⑥一九世紀はじめの調査では、全国の一七軒の労働者の家庭で、一週間に一度も紅茶が出なかつた例は一〇例しかなく、砂糖を使わなかつたのは、一四例しかありません。小麦粉が食卓にのばらなかつた例は一六例ありますので、砂糖と紅茶は少なくとも小麦粉のパンと同じくらいには普及してしまつたといえるのです。ちなみに、ジャガイモ不在のケースも一四例みられます。

（川北稔『砂糖の世界史』岩波ジュニア新書より）

注 * 音をあげ：耐えられず

問一 部①『食事』という言葉は、ここではどのような意味で使われていますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 「主食」と「副食」を食べる」と
- イ. 「ご飯」と「おかず」を食べる」と
- ウ. 「食べ物」を食べる」と
- エ. 「好きな食べ物」を食べる」と

問二 次のア～エは空欄Xに入る文です。正しい順序に直して記号で答えなさい。

- ア. たとえば、ここで検討しようとしている朝食についても、もともとイギリス人は、中世いろいろ一日二食でしたから、朝食というものを食べていなかつたといわれています。
- イ. もつとも、いまでも日本では、正午から一時までが昼食の時間になりますが、イギリス人の昼食は午後一時から二時までのあいだです。
- ウ. 一日三食の習慣ができ、食事の時間帯も、いまのようになつたのは、一七世紀中ごろからのことだと思われます。

- エ. まずなによりもはじめに知つておくべきことは、食事の習慣などというのも、歴史的には、私たちが想像するより、ずっと激しく変化するものだということです。

問三 □Aには漢字一字が入ります。本文中より探して答えなさい。

問四 部②「火曜日も似たようなものさ」とありますか。本文中の言葉を使って四十字以内で説明しなさい。

問五 部③「日本人でも、江戸時代はそうではありませんでした」とありますが、どういうことですか。この説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 機械時計の刻む時刻を正確に守つて行動するのではなく、自分の自然な都合によつて行動するということ。
- イ. 機械時計の刻む時刻を正確に守つて行動するだけではなく、自分の自然な都合によつても行動するということ。
- ウ. 機械時計の刻む時刻が正確かどうか確かめるのではなく、自分の自然な都合が許されるものか考へるということ。
- エ. 機械時計の刻む時刻が正確かどうか確かめるだけではなく、自分の自然な都合も許されるものか考へるということ。

問六 部④「紅茶と砂糖と、店で買うパンやポリッジの朝食」とあります。これについて説明した部分を本文中から二十七字で探し、初めと終わりの五文字をそのまま抜き出しなさい。

問七

--	--

に入る適切な言葉を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア. つまり
- イ. むろん
- ウ. しかも
- エ. しかし

問八

部⑤「朝から十分なカロリーを補給し、ぱつちりと目の醒めた状態で働く労働者」とありますが、この労働者とは反対の労働者について述べている二十三字の部分を本文中から探し、初めと終わりの三文字をそのまま抜き出しなさい。

問九

部⑥「十九世紀はじめの調査」とあります。この調査を紹介することで筆者が読者に示そうとしたことを、本文中から三十三字で探し、初めと終わりの五文字をそのまま抜き出しなさい。

問十

次のア～エの各文について、本文の内容と合っているものには○を、合っていないものには×をそれぞれ答えなさい。

- ア. いまでもイギリス人にとって砂糖は単なる嗜好品ではなく、有力なカロリー源といえる。
- イ. イギリスで同時代に生きたジョンソン博士も夏目漱石も、「オート麦」を朝食として好んで食べていた。
- ウ. イギリスでは工場制度の広がりとともに、時間を厳格に守ることが要求されるようになった。
- エ. 十九世紀はじめのイギリスでは、紅茶はカロリーがなく、価格が高いと栄養学者のあいだで評判が悪かった。

〔二〕次の各問に答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 一 部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ①彼の説明に、みんな納得したようだつた。
- ②皇后陛下が民衆にほほえみかける。
- ③各国の貧富の差が広がつてゐる。
- ④ロンドンにいる友人を訪ねる。

問二 一 部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ①ユウビン局を探す。
- ②物語はイガイな結末を迎えた。
- ③ウラニワに生えている薬草を摘む。
- ④朝食の時間をタンシユクする。

問三 次の①～③の語と反対の意味を持つ熟語を、

〔 〕の中の漢字二字を組み合わせて作り、解答欄に書きなさい。

ただし、同じ漢字は二度以上使わないこと。

- ①安全
- ②単純
- ③自然

天 危 工 惡 險 作 人 雜 混 災 複

B ことわざ・慣用句に関する問題

問四 次の各問いに答えなさい。

①漢数字を一字以上含んだ四字熟語を一つ答えなさい。 (例..一期一会)

②動物の名前を含んだことわざ・慣用句を一つ答えなさい。 (例..犬も歩けば棒にあたる)

C 文法・言葉づかいに関する問題

問五 次の①～③について、【例】を参考に、適切な考え方を答えなさい。

【例】鳥→一羽

①牛
②靴
③椅子

問六 次の①～④について、それぞれ指示に従って、文を書き直しなさい。

①先生はいますか。私は田中といいます。※敬語に直しなさい

②私は佐藤さんが鈴木さんがいないとみんなに伝えたのかと 思った。※文の意味を変えずに、より分かりやすい文に直しなさい

③私は母と父を駅まで迎えにいった。※迎えられたのは父だけと分かるように直しなさい

④これは多くの人に飲んでいる紅茶です。※文法的な間違いのない文に直しなさい

問題は以上です。